

## 東京建具高等職業訓練校 第57期生入校式を開催

東京建具協同組合



挨拶する入校生

東京建具協同組合（岡村宣勝理事長）が運営母体となっている東京建具高等職業訓練校の第57期生入校式及び第56期生始業式が4月8日、東京都江東区のティアラこうとうで行

われた。入校式当日、これから建具技能者を目指す若者が訓練校講師、関係者と初めて顔を合わせた。

入校式は岩木二郎副校長の開式の辞で開始。新入生となる第57期生が紹介され、新入生一人一人が壇上に立ち、自己紹介した。今回の新入生は合計9名。平均年齢は23・7歳と若く、最年少は18歳、最年長は32歳。校長式辞では岡村宣勝校長が「皆



岡村校長の式辞

さんは社会人であり、週に1日仕事を離れて勉強できるのは事業所の理解によるものである。常に感謝の気持ちを持って勉強に励んで欲しい。当校は様々な学科があり、建具工として必要とされる技能と知識の基礎を学ぶことになる。例えば、胴付鋸を挽こうとしても、すぐには出来ない。日曜日などの休みの日に反復練習しなければ出来るようにならない。それが職業人としての知識と技能になる。知識と技能は皆さんの財産。この2年間、自分の財産作りに励んでもらいたい」と、新入生を激励すると共に、訓練に対する心構えを説いた。

来賓祝辞では東京都職業能力開発協会の宮川雄司専務理事と全国建具組合連合会の太田明専務理事が挨拶。宮川専務理事は「愚直という言葉がある。そもそも『学ぶ』ということは『真似る』から始まる。学ぶことは真つ直ぐに受け入れる姿勢が大事となる。自分なりにこの言葉の意味を咀嚼してもらいたい。この学校で大いに磨いてもらいたい。一人前の職人になることを願っている」と、学習への姿勢について言及。太田専務理事は「同年代の人達が訓練校で

2年間学べる環境を得ることは難しい。建具の勉強に関してアンテナを立て、いろいろなものを吸収して欲しい。見ることや聞くことに敏感に反応し、自分の財産を作り上げて欲しい。建具業界は皆さんの飛躍を期待している」と述べ、情報に対する感性を鋭くし、知識や技能を身につけていくことを要望した。

訓練校関係者から東京建具協同組合の坂田龍作相談役と藤原隆相談役がお祝いの言葉を披露。坂田相談役は「これからの時代、技能があれば収入を得ることが出来る。量産品は海外から輸入されるが、日本の建具は極目や材質などの細部にこだわ。現場で打ち合わせて注文通りに製作するのだから高価になるのは当たり前。こうした能力が必要とされており、これから技能の値打ちがでてくる」と語り、これからの時代における技能の重要性を力説。藤原相談役は「私も50年前当校に入校したが、それが訓練校の始まりだった。当時は職人見習いであり、教えてもらいながら仕事をする生活で、ひと眠りしたら翌朝という状況だった。その様な中で、学ぶことによって仕事が出来るようになっていった。先